

## ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼルのイタリア体験

山下 剛

ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼルが生きた1805年から1847年は、後期ドイツ・ロマン派文学の活動期から三月革命勃発の直前の時期に当たり、後にピーターマイヤー期と呼ばれる時期とほぼ重なっている。これは、18世紀末にイギリスで起った産業革命が徐々にドイツにも及び、ブルジョワジーが急激に力をつけていくと同時に、家庭における男女の役割分担が固定化していった時期でもあった。政治的には反ナポレオン戦争に続く保守反動の時代であり、その抑圧的な社会から逃れるように、父親を一家の長とする家庭内のささやかな幸せに大きな価値が見出されていった時代でもあった。

本稿では、このような時代の中でイタリア旅行がファニーにどのように体験され受容されたかを、日記や書簡といった一次資料に即して考察してみたい。ファニーは生涯に二度イタリア旅行をしている（一回目：1839－40、二回目：1845）が、ここで取り上げるのは、ファニーの人生にとって一大転機となった一回目のイタリア旅行である。

### I

ファニーのイタリアとの関わりは少女時代にまで遡ることができる。ファニーは1822年に一家でスイス旅行をした際、イタリアの目と鼻の先までやってきながら、泣く泣くドイツへ引き返さざるを得なかった。このときファニーは胸を焦がすイタリアへの憧れを書簡に記し、またいくつかの歌曲を残している。<sup>1)</sup> そもそも18世紀、19世紀には芸術家や台頭しつつあった市民階級の間でイタリア熱が高まりを見せており、メンデルスゾーン一家ではファニーの母方の叔父で、プロイセンのローマ総領事として現地に

滞在していたヤーコプ・バルトルディ（1779－1815）との文通によってイタリアへの憧れがさらに掻き立てられていたのである。

スイス旅行の翌年1823年には、後にファニーの夫となる画家のヴィルヘルム・ヘンゼル（1794－1861）が留学のためイタリアへ旅立つ。しかし、結婚前のファニーは両親からヴィルヘルムとの文通を禁じられ、ゲーテの『イタリア紀行』を読むなどしていたずらにイタリアへの憧れを募らせていた。ヴィルヘルムがベルリンへ戻った後、1830年に今度はファニーの弟フェーリクス（1809－1847）に、教養完成の旅行の途上でイタリアを体験する機会が与えられる。20歳になったフェーリクスの教養旅行には、音楽家としてのキャリアを積み、視野を広め、人格を完成するという意味のほかに、人脈を作り、自分が今後活動するのにふさわしい土地を見極めるといった実質的な意味もあった。<sup>2)</sup> 故郷のベルリンはかつてフリードリヒ二世の下、啓蒙主義が花開いたプロイセンの王都であったが、今はすっかり反動化し、しかも反ユダヤの気分が強まっていたため、ユダヤ人であったフェーリクスの音楽活動に必ずしも向いていなかったのである。そしてどんなに才能が豊かでも、女性であるファニーには弟のようにプロの音楽家になる道は閉ざされていた。ファニーの祖父モーゼス・メンデルスゾーン（1729－1786）が啓蒙主義を代表する著名な哲学者であり、メンデルスゾーン家では子どもたちに男女を問わず高度な教養教育と音楽教育が施されていたが、ファニーの両親は女性が公の場で活動することを良しとしなかった。ファニーの父方の伯母ドロテア（1764－1839）が最初の夫を捨て、フリードリヒ・シュレーゲル（1772－1829）と駆け落ち同然の結婚をし、そのせいでメンデルスゾーン一家が世間の激しい非難にさらされたことも、ファニーの両親の態度を硬化させた一因だった。ファニーは家庭内に囲い込まれ、妻として母としての役割を期待された。

しかし姉思いのフェーリクスは教養旅行の途上でも、一家そろってイタ

リア旅行をする算段をし、結婚後のヴィルヘルムも妻ファニーをイタリアへ連れ出す計画を練るなどしてはいたが、それらはファニーの妊娠や病気をはじめとする家庭内の度重なる非常事態や予想される膨大な費用、そして何よりもファニーの両親の反対のためにことごとく暗礁に乗り上げていた。そしてスイス旅行以来、実に17年の歳月が流れた1839年秋、33歳になっていたファニーにもこの長年の望みが叶えられる時がついにやってきた。

## II - 1

イタリア旅行には夫ヴィルヘルムと一人息子で9歳になるゼバスティアン（1830－1898）、そして料理番の女性イエツテ（生没年不詳）が一緒だった。当時はイギリスに続きドイツでも鉄道が開通し、安全で快適な旅行が市民階級の間にも広まりつつあったが、イタリア旅行には依然として不測の事態や命の危険が付きものであった。ファニーの書簡や日記もその種の記述に事欠かない。一行はライプツィヒのフェーリクス一家の許に8日間滞在した後、ミュンヘン経由でスイス・アルプスを越えてイタリアの地に入った。

ファニーの手元にはゲーテの『イタリア紀行』とフェーリクスから受け取った1839年9月14日付けの手紙があった。その手紙にはフェーリクスお勧めの観光コースやお勧めの宿などが事細かに記されていた。これらは旅の格好の指南書となるはずだった。だが、ファニーは北イタリアでは好天に恵まれず、ゲーテの紀行文やフェーリクスの手紙とは違って、泥だらけの街の姿を目の当たりにするばかりだった。母親に宛てたファニーの手紙にはこう記されている。「これまでのところ、乞食は皆無、蚤はわずか、両耳の上まで泥だらけ」。<sup>3)</sup> それにミラノの町では息子のゼバスティアンが水疱瘡にかかるというおまけまでついてきた。ヘンゼル一家はミラノに知り合いはおらず、紹介を受けた人たちも不在だった。ファニーは、「人のいな

い町は私にとって魂のない肉体のようなものです」<sup>4)</sup>と書いている。それでも、一行は大聖堂やブレラ美術館やスカラ座からむさぼるように栄養を吸収した後、ヴェローナ、パドヴァ経由でヴェネツィアへ向かう。その途上でもファニーは落ちぶれて荒廃したイタリアの姿を目の当たりにするばかりだった。ファニーがイタリアに抱いていた期待は急激にしぼんでいった。

しかし、10月12日、いよいよ日の光溢れる水の都ヴェネツィアに到着。ここに来て心の中のもやもやは一気に解消し、ファニーは大きな満足感に包まれた。10月13日に家族に宛てた手紙は次のように始まっている。

運命の書物の私の頁に記されていたとおり、私は1839年10月12日午後、ドイツ時間の2時に、ブレンタ川から<sup>ラグーナ</sup> 潟に乗り入れながら、初めてヴェネツィアを遠望し、そしてそのすぐ後にこの不思議な島の町、このビーバーの共和国に第一歩を印し、見物することになりました。<sup>5)</sup>

これはゲーテの『イタリア紀行』の文章をほとんどそのまま引用したものである。ファニーはドイツ歴代の偉大な芸術家と同様に自分もまたイタリアの地を踏んだ感動を、大好きなゲーテを気取って少々おどけて表現したのである。

しかし、ファニーはゲーテやフェーリクス<sup>リクス</sup>の跡ばかりたどっていたわけではない。ファニーはヴィルヘルムとともに、自らの足で、またゴンドラに乗って、教会や歴史的な建造物、それにティツィアーノ、ヴェロネーゼ、ティントレットといったヴェネチア派をはじめとするルネッサンス絵画などを精力的に訪ね歩き、水に浮かぶこの町の美しさに魔法をかけられたようになる。そして運河沿いや路地に息づく現地の人々の生き生きとした暮らしぶりにも感じ入っている。ファニーは家庭の主婦らしく南国の豊かな果物類に驚嘆し、ベルリンとイタリアの食習慣の違いにも興味を抱いてい

る。また一方で、世界情勢にも強い関心を抱いている。ファニーは毎晩カフェで新聞に目を通し、ドイツの情報にも常に注意を怠らなかつた。ドイツは政情が不安定であり、場合によっては旅程を切り上げて帰郷する必要も感じていたからである。ヴェネツィアといえば、かつてバロック音楽の一大中心地であったが、しかしファニーの日記や書簡には現地の音楽に関する話題はまったく見られない。ヴェネツィアに来てから知り合った芸術家の中で満足し心を許して付き合える人物は、一家に宿を提供してくれたスイス人画家のオレル・ロベール（1805－1871）だけだった。

次に訪れたフィレンツェで一行はピッティ宮殿、ウフィツィ美術館などを見学している。ファニーはフィレンツェが所蔵する無尽蔵とも言える芸術品の数だけでなく、それらを鑑賞する者たちに与えられている「寛大さ（Liberalität）」<sup>6)</sup>に驚きと戸惑いを感じている。例えば、どの部屋にも名画の模写をしている絵描きがあり、汚れたパレットを高価この上ないモザイクのテーブルの上に無造作に置いたりしていた。また、雨でずぶ濡れになったファニーたち自身も入館を断られることなく、文化財級にもかかわらずカバーすら掛けていないビロードのソファーにどっかと腰を下ろして、雫が滴る着衣を乾かすことすらできたというのである。この寛大さはしかし、見方を変えれば、芸術作品や美術品を冒瀆する無頓着さでもあって、プロテスタントが支配的な北ドイツ出身で秩序を重んじるファニーは展示する絵の選択や順番にも大きな不満をもらしている。

## II - 2

1839年11月26日夜に一行は無事ローマに到着する。夫ヴィルヘルム・ヘンゼルがプロイセンの宮廷画家であったため、イタリア旅行の前半はルネッサンス絵画や教会建築、古代遺跡などを精力的に見て歩く旅となっていたが、ファニーはローマで思いがけず音楽活動を再開することになる。

知り合いのヴァイオリニストがローマで旅行者向けに音楽サロンを開いており、ファニーはそこでピアノ演奏を披露するようになったのである。そしてファニーの好奇心は専門の音楽へも向けられた。しかし現地の音楽に関する記述は肯定的なものではない。ファニーはローマでのオペラ上演やバレエのレヴェルの低さに失望している。9年前のフェーリクスの時もそうだったが、ローマでは音楽の繁栄はすでに過去のものとなっていたのである。

古い音楽にも関心があったファニーは、フェーリクス同様システィーナの礼拝堂に赴いた。ところが、女性は差別を受け、法王のミサに参加することができず、近視のファニーははるか遠くの鉄格子の陰に腰を下ろし、「法王の礼拝堂のとても不純で凡庸な歌や二人の枢機卿の震える声によるミサの面白くもない朗読」<sup>7)</sup>に耳を傾けることしかできなかった。復活祭の時にはそれでも礼拝堂内の鉄格子のすぐ後ろに進み出ることが許されて、ミサの音楽をはじめから終わりまですべてたどることができた。プロテスタントでJ.S.バッハを敬愛していたファニーの耳には、儀式や礼拝で使われている受難曲は次のように受け取られた。

私はその時ずっとゼバスティアン・バッハのことを考えていた。歌のあの硬直した形式はとても古いモザイクを強烈に思い起こさせた。[……] 私はこうも思う。ビザンティンの教会でならあの歌も不都合だとは感じなかつただろう。でも、ここシスティーナでは造形芸術が完成の、いや爛熟の最高の瞬間にあるので、あの歌は硬直とみすぼらしさという際立った対照をなして聞こえてしまう [……]。<sup>8)</sup>

ファニーはしかしカトリックの<sup>カルネヴァル</sup>謝肉祭には全身をゆだね、その興奮を徹底的に体感している。夫のヴィルヘルムはこのとき病の床に臥せていた

が、ファニーは夫の看病に明け暮れる気の滅入るような日常や良家の子女として守るべき因習やしがらみから束の間解放されて、自由の空気を思う存分吸い込んだ。ファニーは身の安全のために馬車に乗り込み、仮装した人たちの群れやきれいに飾り立てられた馬車などを間近に見、石灰の粉や紙吹雪や飴や花束を投げつけられながら、すさまじいお祭り騒ぎの中を動き回った。ファニーは近視で柄つきの眼鏡が手放せなかったのも、柄つきの仮面ではなくベールだけで紙吹雪の攻撃から顔を守らなければならなかった。ファニーのイタリア体験は翌年の1841年にピアノ連作集『一年』として結晶するが、ローマの謝肉祭の様子はその中の「二月」に作品化されている。そこでは軽妙なスケルツォによって謝肉祭の乱痴気騒ぎが再現され、祭りの終わりを告げる時計台の音とともに、夜が白々と明けていく様子が印象的に表現されている。

## II - 3

次に、夫ヴィルヘルムとファニーの芸術観の違いを窺わせる興味深いエピソードを二つ紹介しよう。

一つはヴィルヘルムのオリエント行きにまつわる話題である。1840年4月5日の晩にファニーとヴィルヘルムはフランス人戦争画家のオラス・ヴェルネ（1789－1863）と知り合う。ヴィルヘルムがヴェルネに、オリエントへ激しい憧れを抱いていると語ると、ヴェルネはひどく驚いた様子で、それなら今からでも行ったらどうだ、2週間あれば着いてしまうのだから、と答えた。ファニーは夫にオリエント行きを強く勧めた。ところが、ヴィルヘルムが出した結論は、「自分の当面の義務を果たし、そして時を待つ」<sup>9)</sup> というものだった。ヴィルヘルムの堅実すぎる態度に少なからず失望したファニーは、日記の中にこう書いている。

私たちドイツ人はいつも待つばかり！ いつも機会を逃してばかり！  
いつも遅れて来る！ 自分の時、自分の家族、自分自身から立ち上がる  
のが遅すぎるのだ！ この事実は私を激しく捕らえ心底から掻き乱す。<sup>10)</sup>

ヴィルヘルムは市民的な幸福を重んじる典型的なビーダーマイヤーの画家だった。彼の芸術は生活との調和を重視するもので、ロマン派的な激しい憧れを胸に抱きつつも、彼には妻と子どもの存在という現実をないがしろにしてまで願望の充足を図ることは考えられなかった。ヴィルヘルムは当時、歴史画家、宗教画家として世に認められていたが、現代の目からすると、彼の本領は何ととっても同時代人や身の回りの人物を描いた肖像画にある。しかしそれらは親しげで善意に満ちてはいるが、芸術としては残念ながら二級品の域を出ない。彼の肖像画は対象に肉薄してその本質をありのままにつかみ取るというものではなく、対象を少なからず理想化して受け入れやすいものにしてしまう。これがヴィルヘルムの絵画の限界であった。ヴィルヘルムはフェーリクスと違って、ファニーの音楽活動を積極的に後押ししてはいるが、それがファニーのやむにやまれぬ創作意欲をどこまで理解した上でのことだったのかは、議論の余地がある。ファニーは現実的なヴィルヘルムによって守られていたが、これがファニーの世界を逆に狭めてしまったとも考えられるのである。

もう一つの話は、ドイツのナザレ派の絵画を巡る二人の意見の相違である。ナザレ派とはドイツ・ロマン派に属する絵画グループで、主に聖書に題材をとった宗教画をローマで共同制作していた。ファニーとヴィルヘルムは1840年5月3日にナザレ派の画家フリードリヒ・オーヴァーベック(1789-1869)を訪ねている。ヴィルヘルムがカトリックの芸術にもある種の親和性を感じていたため評価が甘くなっているのと異なり、ファニーのものの捉え方には容赦がない。この年の1月はじめに、大好きだった今



は亡き叔父が住んでいたカーサ・バルトルディを訪ねたときには、壁一面に描かれたナザレ派のフレスコ画に深い感慨を抱いたファニーも、オーヴァーベックの家で見た絵画の出来には疑問を呈し、彼が自分自身と、さらに二人の画家仲間の姿を「現代の選ばれし唯一の者たちとして絵の片隅に描き込んでいる」<sup>11)</sup> のを目の当たりにすると、その「大変な思い上がり」<sup>12)</sup> がどうにも我慢ならず、こう書いている。

私ははっきりと言っておかなければならないが、ヴィルヘルムの意見は違っている。そして彼はこの絵を私よりはるかに高く評価している。だが私は大家というものをうまく受け入れることができない。たとえヴィルヘルムの言う大家であろうと。私は自分のこの目で見たいのだ。<sup>13)</sup>

他人の意見に左右されず、ものごとを自分の目で見、自分の感覚で理解しようという主体的な姿勢はイタリア旅行中ファニーに一貫している。

### Ⅲ

ファニーは現地の音楽生活の貧弱さとともに社交に足る人材の乏しさを嘆いていた。しかしヘンゼル一家のローマ滞在がいよいよ終わりに近づいた1840年4月ごろから、彼らの周りに芸術家たちのとても親密なグループが出来上がっていった。そしてこのころからファニーにとって人生でもっとも幸せな2カ月が始まる。

グループの中では特にフランス・アカデミー会員であり、ローマに留学中だった3人の若者の名前を挙げなければならない。作曲家のジョルジュ・ブスケ（1818－1854）とシャルル・グノー（1818－1897）、画家のシャルル・デュガソー（1812－1885）である。ファニーも彼らの若々しい情熱にほだされて毎日のようにピアノを演奏して聴かせている。好んで取り

上げられたのは、J.S.バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、フェーリクス・メンデルスゾーンといったドイツ音楽の本流に属する作曲家が中心で、ファニー自身の曲目も含まれていた。当時フランスではJ.S.バッハはほとんど知られておらず、ベートーヴェンもごく一部のピアノ曲などが知られているにすぎなかった。そのため、ファニーの演奏は彼らにこの上ない驚きと感動をもたらした。

ところでイタリア旅行に出る前の10年間は、作曲家としてのファニーには苦悩の時期だった。ファニーは1830年のゼバスティアンの出産直後から、作曲意欲の減退と靈感の枯渇に陥っていた。ファニーは幼い子どもの世話や家事、「日曜音楽会」の主宰、そして1835年の父親の死後はさらに母と妹一家の世話に追われ、作曲のための時間がなかなか持てずにいた。そしてもっともこたえたのは、自分の作品を出版したいという希望にフェーリクスの賛同が得られなかったことであり、ファニーは作曲家としての自信をすっかり失い、鬱々とした日々を送っていたのである。

ファニーはフランスの若き芸術家たちからピアノの技量と作曲の才能を絶賛され、音楽家として敬愛されるにつれ、心がますます解放されていった。ファニーは1840年4月23日の日記にこう記している。

ブスケとデュガソーにはほんとうに頭が痛い。というのも、私が彼らに一度だけ、それも何か月も前に弾いてやったものを、一つとして忘れていないのだから。これ以上の聴衆はほんとうにいない。私も今たくさん曲を書いている。人に認めてもらえることほど励みになることはない。逆に悪口を聞くとがっかりきてやる気がなくなる。グノーはあまり見たことがないほど一種情熱的に音楽の虜になっている。私のヴェネツィアの小曲がとりわけ彼のお気に入りだ。さらには私がここで作った口短調の曲、フェーリクスの二重奏、同じくフェーリクスの

イ短調の綺想曲、そして中でもバッハの協奏曲。これなどは少なくとも10回は演奏しなければならなかった。<sup>14)</sup>

この時期ヘンゼル一家は彼らやその他の仲間たちと連れ立って頻繁にローマ市内や郊外へ繰り出し、ファニーはこれらの土地に触発されて数多くの曲を作っている。そしてそれらは「私にとって将来にわたって愉快的思い出のよすがとなり、第二の日記のようなものになる」<sup>15)</sup>とファニーはレベッカ宛ての手紙に書いている。また、ファニーは詩の女神ミューズとしてフランスの若者たちの創作意欲を掻きたてた。例えば、当時22歳だったグノーはファニーに強く惹かれつつ、ファニーを通して急激にドイツ音楽の虜になっていく。特に、J.S.バッハは彼らにとって特別なものとなっていた。5月2日の晩に自宅でグノーとブスケを前にしてまたピアノ演奏を披露したファニーは日記にこう記している。

晩に私は何曲か、そして最後にまたバッハの協奏曲を演奏した。あの人たちはもう何度も聴いたことがあったのに、バッハに大感激で、私の手に接吻するわ、手をぎゅっと握りしめるわで、まったく気持ちを抑えきれない様子だった。特にグノーはものすごく元気いっぱいだった。そして私が彼にどんな影響を及ぼしているか、彼が私たちについてどんなに幸せかということ私に表現しようとして、彼はいつも言葉が見つからないのだ。あの二人はまるで違っている。ブスケは落ち着いていてフランスの古典的な円熟に惹かれており、グノーは並外れてロマンチックで情熱的だ。さてこうなるとドイツ音楽を知ることは彼には家に爆弾が落ちるようなもので、大きな被害を引き起こすことになるかもしれない。<sup>16)</sup>

ファニーがフランス・ロマン派音楽に与えた影響は決して小さくないと思われる。そのことはグノーが後に発表し有名となった歌曲『アヴェ・マリア』一つを指摘するだけで十分だろう。この作品は、言うまでもなく、バッハの『平均律クラヴィーア曲集』の第一曲に旋律を乗せたものであり、ファニーとの出会いがなければ、おそらく生まれることはなかった。この真偽は後の研究に待たなければならないが、一説によれば、これはファニー自身が作曲したものだとも言う。また、後のフランス歌曲や宗教曲、さらに『ファウスト』を始めとする劇音楽の隆盛にもファニーからの直接間接の影響を指摘できそうに思う。今後は独仏の音楽交流においてファニーが果たした役割が詳しく検討される必要があるだろう。

ローマ滞在が残り2週間になったころから、体験の中身はますます濃密となり、同時にファニーの心には感傷の影が濃くなっていく。そのころの日記には次のような言葉が見える。

このような変化に富んだいろいろな体験をしたというのに、私はここに来てから年を取った気持ちがしない。むしろ若返ったように感じる。このような旅行からは永遠の宝物が手に入るのだ。<sup>17)</sup>

そしてローマを発つ前日の6月1日月曜日の日記の最後にはこう記されている。

私はどんな時間によっても色褪せることのない、永遠の、移り行かない映像を魂に刻み込んだ。おお神よ、あなたに感謝します。<sup>18)</sup>

1840年6月2日にヘンゼル一家はナポリを目指しローマを後にする。旅行のクライマックスは終わり、これから先一家を待ち受ける目的地は、ロ

ローマほど彼らを感動させ熱狂させることはもはやなかった。ファニーは疲れ切っていた。ファニーとヴィルヘルムの心はずっとローマに残ったままだった。これから先は残された旅程をこなす義務的な観光旅行のようなものになった。一行は約2カ月ナポリに逗留した後、ジェノヴァ経由でベルリンへの帰途につく。

#### IV

一行のイタリア滞在は冬を挟んでほぼ1年間に及んだ。ローマで作曲家としての自信を取り戻したファニーは、帰郷後は弟フェーリクスの反対を振り切るように、積極的に出版活動に乗り出していく。

ファニーのイタリア旅行は、フェーリクスのそれとはだいぶ様相が異なっていた。フェーリクスもイタリア音楽の現状には大いに不満を抱いたが、しかし美しい自然や古代ローマの遺跡や絵画との出会い、そして華やかな社交生活が、彼の音楽創造に豊かな靈感を与えた。フェーリクスは若々しい体内にイタリアの魅力を積極的に吸収していったのである。しかしファニーにとってのイタリアは、自己の芸術観との常なる対決を強いるものだった。33歳から34歳のファニーにはすでにしっかりとした審美眼と豊かな見識があった。そしてファニーはイタリアの芸術や文化と向き合い、フランスの若き芸術家たちと交流を深めることで、自己の立場をさらに明確にしていった。音楽家としてのファニーの活動の場はそれまでベルリンの自宅を開放して催していた「日曜音楽会」に限られており、ファニーは自分の才能に確信を持たずにいたが、イタリアの地でほかの芸術家に影響を与え得るほどの才能を自覚するにいたった。そこにはまぎれもなく一個の確固とした芸術家の姿を見ることができる。

## 注

- 1) 拙論：メンデルスゾーン姉弟とスイス。東北薬科大学「一般教育関係論集」18、2004年〔2005年発行〕、51－53頁参照。
- 2) 同上。55－56頁参照。
- 3), 4) Sebastian Hensel, Die Familie Mendelssohn 1729-1847, Berlin (B. Behr's Verlag)  
<sup>10</sup>1900, Bd.II, S.75; Brief vom 27. September 1839 aus Bormio.
- 5) Ebd., S.76; Brief vom 13. Oktober 1839 aus Venedig.
- 6) Ebd., S.85; Brief vom 19. November 1839 aus Florenz an Rebecka.
- 7) Ebd., S.88-89; Brief vom 28. November 1839 aus Rom an die Familie.
- 8) Ebd., S.109; Tagebuch vom 18. April 1840.
- 9), 10) Ebd., S.107, und S.107-108; Tagebuch vom 5. April 1840.
- 11), 12), 13) Ebd., S.119, S.119 und S.119-120; Tagebuch vom 3. Mai 1840.
- 14) Ebd., S.115; Tagebuch vom 23. April 1840.
- 15) Ebd., S.117; Brief an Rebecka. 日付なし (1840年4月末?)。
- 16) Ebd., S.118-119; Tagebuch vom 2. Mai 1840.
- 17) Ebd., S.127; Tagebuch vom 17. Mai 1840.
- 18) Ebd., S.137; Tagebuch vom 1. Juni 1840.

付記 本稿は、日本比較文学会 東北・北海道支部 第3回「比較文学研究会」(2005年12月3日、於東北大学)において口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。

### 誤植

一般教育関係論集 18号 57頁 17行目

誤) 心身を休める<sup>トボス</sup>として → 正) 心身を休める<sup>トボス</sup>場所として